仏訳『デカメロン』研究 II
—アントワーヌ・ヴェラール、印刷書籍商又は戦略家—

平　手　友　彦

序

印刷術の発明が活字文化の発展に大きな役割を果たしたことは明らかである。しかしながら、これにより書物の世界が一変したのではなく、また、当事者、即ち初期印刷書籍商も自らが「革命家」だとは信じていなかったようだ[1)]。実際この発明はテクストの正確さや新たな読書形態の創出をもたらしたのではなかった。印刷機から生まれた揺藍本インクナブラは、写本から少しずつ、そしてゆっくりと私達が現在手に取る「書物」に変化していくのである。

他方で、この揺籃本の作者と読者の問題はどうだったのだろうか。今日と同様、書物には作者から読者へ様々な指示が行われていたはずである。しかし、揺藍本の世界では著作権も未確立で、その上テクストも再版が多く、「作者」を文章化作業の担い手（即ち「著者」）と一冊の書物を作るそれ（「出版者」）とに峻別することが必ずしも容易ではない[2)]。更に、「出版者」からのテクストへの介入や、書名、著者名、序文、献辞、挿画等の「パラテクスト」paratexte[3)] の新たな設定で、読者の手に渡る「書物」は大きく変えられることさえあった。

アントワーヌ・ヴェラール Anthoine Vérard はそんな二つの問題を体現した初期印刷書籍商である。豪華な写本の書字や細密画の彩色を行う工房を営んでいた彼は、いち早く印刷本に着目し、書物の体裁にこだわり、写本

に似せて印刷本を製作した。更に、著者名を変え、時には自らが「著者」に成りすまして序文まで書いてしまうことさえあった。このヴェラールが自らの商売の先駆けとして1485年11月22日に世に出した作品がボッカチオ Boccaccio の仏訳『デカメロン』*Decameron* である[4)]。この出版に際しヴェラールが使用したテクストは、ボッカチオを始めとするキケロ Cicero、スタティウス Statius の翻訳者ローラン・ド・プルミエフェ Laurent de Premierfait（1365？－1418）が、フランシスコ修道士アントニオ・ダレッツォ Antonio d'Arezzo（生没年不詳）の助け（イタリア語原典からラテン語への翻訳）を借りて1414年に完成させたものであった。このプルミエフェとその仏訳については既に論じたが、ここでこの仏訳の意図を簡単に振り返っておこう[5)]。

プルミエフェは『デカメロン』以前に、当時人気のあったボッカチオのラテン語作品『名士列伝』*De casibus virorum illustrium* を二度仏訳しているが（1400年の *De la ruyne des nobles hommes et femmes* と1409年の *De cas des nobles hommes et femmes*）、『デカメロン』をこの『名士列伝』の道徳的教訓を引き出す多様な物語群として位置付け、ここに「楽しさよりも役に立つことを多く見つける」べく仏訳を行った。その意味でこの仏訳の意図は『名士列伝』の具体例を提示することだった。

15世紀末も依然『名士列伝』の人気は衰えることなく、1485年当時既に二種類の仏訳が出版されていた。ヴェラールもこの『名士列伝』を意識して仏訳『デカメロン』の出版に及んだのではないだろうか。このプルミエフェ訳『デカメロン』も人気を博し、その後七度版を重ねることになる（1503年頃、1511年、1521年、1534年、1537年、1540年、1541年）。本論文では、印刷書籍商アントワーヌ・ヴェラールの出版の実際を探るとともに、1485年の仏訳『デカメロン』の意味を、その「序文」と「結び」に考察する。

印刷書籍商アントワーヌ・ヴェラール

1485年から1512年までに280点の刊本と3点の写本を世に出した印刷書

籍商アントワーヌ・ヴェラールについては、ジョン・マクファーレン John Macfarlane の研究以降、網羅的な研究が行われてこなかったが、ようやくここ最近になってマリー・ベス・ウィン Mary Beth Winn が全貌を明らかにしつつある[6]。ヴェラールの名前が初めて現れるのは1485年９月12日の日付が入った『ローマの時禱書』*Horae ad usum Romanum*[7] のコロフォン（奥付）colophon で、それによれば、彼は既に「パリ在住の書籍商」libraire demourãt a paris で、店舗も「ノートル・ダム橋上」sur le pont ñredame とシテ島の「（サント）シャペル前の裁判所第一回廊」au palaiz au pmier pylier deuant la chapelle の二ケ所に設けていた[8]。初期（1485－89年）は、自ら印刷に携わったのではなく、他の印刷・出版業者（例えば、ジャン・デュプレ Jean Du Pré、ピエール・ル・ルージュ、ピエール・ルヴェ Pierre Levet 等）に印刷に必要な道具を貸し与えて、出版を依頼したようである。また、財源確保の為に歴史家でありヴァロワ王家の役人でもあるニコル・ジル Nicole Gilles[9] と協力関係を結んだり、シャルル８世 Charles VIII の侍講で翻訳家のギヨーム・タルディフ Guillaume Tardif とは王の依頼で時禱書を製作したらしい。また、王権の庇護を意識して、宮廷に近い書き手、オクタビアン・ド・サン＝ジュレー Octavien de Saint-Gelais、ロベール・ガガン Robert Gaguin、クロード・ド・セセル Claude de Seyssel 等の作品も積極的に出版した[10]。恐らくヴェラールは比較的早い時期、遅くとも1491年頃までには、当時の王権力に食い込んでいたようである。彼の庇護者にはシャルル八世、ルイ十二世 Louis XII、アンヌ・ド・ブルターニュ Anne de Bretagne、ルイーズ・ド・サヴォワ Louise de Savoie、そして印刷本愛好家イングランド王ヘンリー七世 Henry VII 等がいた。その後、ヴェラールはトゥール Tours にも商売を拡大し[11]、印刷工の雇用数も増えて1492－94年には六人の名前が挙がっている[12]。1497年までにはこの書籍業で相当の富を築いたらしく、同年オルセー Orsay 司教区のマンシュクール Manchecourt やポントワーズ Ponthoise 近郊のボールギャール Beauregard に土地を購入した。順風満帆の商売であったが、1499年10月25日に住居兼

店舗があったノートル・ダム橋流失の災いが彼を襲う。新橋が架けられるまで、ヴェラールは他の住民と同じく他に家を借り受けねばならなかった[13]。1499年以降に出版された書籍のコロフォンからその住所の特定が可能で、1499年の終わりから1500年9月は「サン・セヴラン十字路近くのプチ・ポン」petit pont pres du carrefour Saint Severin に、その後1503年8月までは「プチ・ポン近くのサン・ジャック大通り」en la grand rue Saint Jaques pres petit pont に、更にこれ以降は「新ノートル・ダム通り前」devant la rue neufve Nostre Dame へと移動した。1504年9月6日の日付のあるジャック・ド・セソール Jacques de Cessoles の仏訳作品『チェスの教訓』*Jeu des eschez moralise* では、ヴェラールは自らを「パリ大学宣誓書籍商」Libraire iure en Luniuersite de Paris と名乗ることになる。また、1508年1月17日出版の仏訳『聖パウロ書簡』*Epistres sainct Pol* ではルイ十二世から三年間の「出版允許状」privilege が与えられた。パリではヴェラールが初めて允許状を受けた印刷書籍商であった。1512年3月、ヴェラールは、息子クロード Claude が入るクレルヴォー Clairvaux の修道院に遺贈するため、自ら出版した書籍を何点か選び、その旨を巻末に書き入れる。そして、そのほぼ半年後の7月24日にニコル・ド・ラ・シェスネ Nicole de la Chesnaye の『権威の書』*Liber auctoritatum* を生前最後の作品として出版する。ヴェラールが出版した書籍の殆どが俗語、つまりフランス語作品であったが、最後の出版は意外なことにラテン語作品だった。(例外は時禱書で、その他のラテン語作品は極めて少ない。) 彼の死後は、未亡人のジェルミンヌ・ギアールが他の印刷工等と協力して印刷書籍業を続け、続いて息子バルテレミー Barthélemy が父の仕事を引き継いだ。

ヴェラールの成功の秘訣は一体何だったのだろうか。ヴェラールは出版業を始める以前 (1485年) は飾り文字職人、細密画家だったらしいが、これを証明する十分な資料は残されていない[14]。しかし、写本製作の技術を印刷本製作に組み合せたことは間違いなく、これが大いに当たったのである。彼が着目したのはブルージュ Bruges のコラール・マンシオン Colard

Mansion が始めた豪華な写本に似せて印刷本を製作する方法で[15]、これを自らの商売の成功に結び付けたのである。ややもすれば、私達は印刷術誕生によって、書籍を速く多量に刷り上げるという情報伝達の側面を強調しがちであるが、中世の写本の世界から出発したヴェラールはその「書物」としての視覚的魅力を忘れることはなかった。印刷術を知った「ルネサンス人」ではなく、むしろ「中世の人」がヴェラールの成功を導いたのである。ヴェラールが書いた数少ない詩の一つが『キリストの受難』*La Passion Jhesuscrist*（1503－8年頃）の序を飾っているが、そこで、この書籍商は「言葉よりも絵の方がより一層熱烈な欲望をかき立てるものです」signes font esmouuoir / Desirs feruentz plus que dictz mouuoir,[16] と語っている。ヴェラールはこの言葉通り、さながら写本の再現のごとく、版本の幾つかを犢皮紙に印刷し、木版画や細密画（とりわけ、庇護者に書籍を献ずる自分の姿）、それも当時の第一級の職人の手による木版画や細密画を口絵に配し、国王や大諸侯向けの（時禱書[17] に代表される）献呈豪華本の製作にいたる。そうする一方で、貴族階級のみならず、今までは読書の恩恵に与れなかった新たな書籍購買層を開拓していったのである[18]。

しかし、ヴェラールは「理想の本」を作り上げるために、「絵」だけにこだわったのではない。彼自ら書いた献辞付き序文19点がそれを物語っている[19]。当時ヴェラールのように自らの出版物にこのような序文を付したのは、カクストン Caxton やマンシオンに例があるが、必ずしもパリでは多くはなかった。確かにジョス・バード Josse Bade は775点中、226点にラテン語の序文を付けたが、その内容は、作品の紹介、読者の慈悲への訴え、教育と学習に関する自らの見解の表明に限られ、犢皮紙も使わなければ、挿画も入れてなかったらしい。他方、ヴェラールの序文の内容は、追従の献辞、作品がパトロンにふさわしい内容[20] と価値を持つことの説明、自分の仕事振りに対する評価、内容要約、神への祈願で構成されていた。バードは「ルネサンス人」らしく、印刷術を知識の普及として出版活動を行ったが、ヴェラールは出版を商行為に位置付け、書物をそのための商品とし

た。このヴェラールの序文19点の内7点は、既に作者、翻訳者、編纂者が書いたものをヴェラールが自分の都合に合わせて作り変えたものであった。ということは、19点の内12点は自ら筆を取ったことになり、彼には手っ取り早く出版出来る作品ではなく、あくまでも需要に応じた作品を選定することが重要であったことがわかる。また、序文作成まではいかないまでも、後述する仏訳『デカメロン』のように、インキピット（冒頭文）incipitやコロフォンのみでなくテクストのレイアウトから内容まで変更し[21]、時には著者名や翻訳者名を変えたり、伏せたりして出版した作品も残されている。

このように見てくると、ヴェラールの出版戦略は、ルネサンス期の学者兼出版・印刷業者とは大きく異なり、印刷本を写本の延長と捉え、すでに評判を得た作品を自分流に加工して、十分な装飾を施し、時の王権や大諸候に捧げることで庇護者を獲得し、更に書籍購買層を開拓して利益を得るというものであった。この点では当時のパイオニアであった[22]。しかし、他方では作品の帰属性（「作者」）ということになると、ヴェラールがこの方法を採用したことで、「著者」と「出版者」との峻別は困難を極めるのである。

ヴェラールの仏訳『デカメロン』

細密画や彩色を施した仏訳『デカメロン』の写本が多く残されているにも関わらず[23]、写本に似せた豪華本製作に長けたヴェラールが出版した仏訳『デカメロン』は、そのような出版書籍商から出たとはおよそ思えない程、シンプルで一見粗雑とも言える出来の作品であった。それは二ツ折判で、インキピット、（ボッカチオの）「序文（初日の序話）」、目次、本文、（ボッカチオの）「結び」、コロフォンで構成されており、34行二段組で278紙葉（1枚目が欠）に印刷され、挿画は図1の木版画一種類のみで、これがほぼ各日の第一話に繰り返し十回用いられている[24]。この木版画には“bocace”と刻まれた著者と、王冠を載せた「女王」パンピネア Pampinea

らしき人物を中心とした女性八名と男性三名が描かれている。先のヴェラールの言葉とは裏腹に、木版画については着想や表現の不適切さで評判が悪いようであるが[25]、この木版画そのものは女性の人数が一名多いことを除けばさほど出来は悪くはない。

図1

しかし、挿画が一種類というのは、ヴェラールが後に出版する『名婦列伝』*De la louenge et vertu des nobles et cleres dames*（1493年）、『名士列伝』*Des nobles malheureux*（1494年）等の他のボッカチオ作品で木版画が数種類使われたことを考え合わせるとやはり貧弱と言わざる得ないだろう[26]。仏訳『デカメロン』で使用された活字は当時仏語作品によく用いられた「折衷書体」biâtard で、その活字から実際にこれを印刷したのはJ. デュプレとされている[27]。J. デュプレと言えば、パリで初めて木版画を使った作品『パリのミサ典礼書』*Missele Parisieuse* を1481年9月22日に出版して、国王や大諸侯向けの豪華本製作の先駆けとなった印刷書籍商である[28]。木版画の出所を

特定することは無論容易なことではないが、活字がJ. デュプレのものであることから考えて、木版画も彼の工房が大きく絡んでいるのではないだろうか[29]。では一体、ヴェラールはどのように仏訳『デカメロン』を製作したのだろうか。

まずは、ヴェラールが訳者ローラン・ド・プルミエフェをどのように理解していたかを考えてみよう。プルミエフェ訳『デカメロン』の写本は15点（1点は断片）現存するが、プルミエフェの完全訳は3点のみで、あとは全て第10日目の最後の話「グリゼルダ Griselda の物語」が15世紀初頭の散文フランス語訳（訳者不詳）『グリゼルディス物語』*L'ystoire de Griseldis* に差し換えられている[30]。ヴェラール版での変更が激しいために、彼が参照した写本は特定されていないが、各写本（インキピットとエクスプリキット（結句）explicit）と、ヴェラール版（インキピット、「序文」、コロフォン）を比較すると様々な事が見えてくる。

第一に、当初ヴェラールはプルミエフェの『デカメロン』訳が二重訳であったどころか、オリジナルが何語であったか十分に理解していなかったのではないか。ヴェラールは1503年頃に仏訳『デカメロン』を再版するのだが、そのコロフォンには「ラテン語からフランス語に翻訳した」という記述がある一方で（... lequel / liure ia pieca cōpila et escript Jehan bocace / de certald de latin qui depuis nagueres a / este translate de latin en frācoys ꝑ maistre / laurens du premier fait[31]... 下線強調は平手、以下も同じ）、初版にはこの「ラテン語から」という記述が見られない（... leq̄l liure iapieca cōpila et escript ie/hā bocace de certald de lati q̄ depuis / nagueres a este trāslate ē frāncoys / ꝑ maistre laurēs du p̄mierfait... 265 v）。（なお、両版のインキピットにはこの翻訳に関する記述はない。）現存する写本を見ると、尽く「まずラテン語に、続いてフランス語に」premierement en latin et secondement en francois 翻訳されたという翻訳過程の説明があり、この説明が発見出来ないのは、プルミエフェの完全訳ではない B.N. franç. 1122写本のみで、そのコロフォンには「フランス語に訳された」translate... en

françoys とだけ記されている。つまり、現存する写本を参考に印刷原稿を作成しようとすれば、自ずからこの二重訳については知ることができたはずである[32]。にもかかわらず、ヴェラールは1485年時点では、フランス語に訳されたことにしか触れていない。これはヴェラールが仏訳『デカメロン』製作の際に、B.N. franç. 1122の系列に属する写本を参考としたことを意味するのだろうか[33]。それとも二重訳の経緯については知らなかったのであろうか。これは次の問題にも絡んでくる。

第二に、私達はボッカチオのこの作品を当たり前のように『デカメロン』と呼んでいるが、『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』の著者のように当時は「百物語の書」livre de Cent Nouvelles[34] と呼ぶのが常であった。事実、ヴェラール版では通常 “liure des Cent Nouvelles” と呼ばれ、コロフォンには “Decameron” ではなく “cameron” と記されている（...liure no/me cameron... 265 r; ...le liure de camerō ... 265 v)[35]。この “De” の欠落はヴェラールが “Decameron” という名称をよく知らず、写本の “decameron” の “de” を前置詞と解釈したからではないだろうか。写本を調査すると（Bozzolo の転写という条件付きではあるが）、“de” を前置詞とした誤解を招き易い同格表現、即ち “liure decameron” のみが使われているのは、B.N. franç. 1122 と Bodleian L., Douce 213 の二点で、Paris B.N. の franç. 239、franç. 240、Harvard Richardson 31、Pennsyilvania FR. 9 の四点はこの表現とともに、“appelle Decameron” 等の誤解を招きにくい表現が併用されている。これらの写本の中にプルミエフェ完全訳の三点は何れも含まれていない。すると、ヴェラールが参考にした写本はプルミエフェ完全訳ではなく、やはり例の訳者不詳の『グリゼルディス物語』と差し換えた系列に属する写本なのだろうか。実はこの『グリゼルディス物語』がその考えを後押しするのである。ヴェラール版の「グリゼルダの物語」では、目次と本文で “Griselidis” となっているが、ボッカチオ研究の先駆者アンリ・オヴェット Henri Hauvette の調査によれば、プルミエフェ完全訳写本 Paris B.N. fr. 129 と Arsenal 5070 では常に “Griselde” と呼ばれているのだ[36]。更に、ヴェ

ラールが仏訳『デカメロン』を出版する約十ヶ月前（1485年1月18日）には、ブルターニュのブレオー・ロデアク Bréhaut Lodéac でこの『グリゼルディス物語』*Histoire de la constance et patience d'une fame laquelle se nommoit Griselidis* が出版されており[37]、この版本を商売上手なヴェラールが利用したのかもしれない。しかし、何れにしても、最終的な結論は各写本とヴェラールの版本との詳細な校合を待たねばならないだろう。

第三は、ヴェラール版では訳者プルミエフェの名前をインキピットから消し去ろうとする意図が見られることである。例えば、写本10点のインキピットには訳者プルミエフェの名前が読めるが[38]、ヴェラールの初版と再版のインキピットにはこれが現われていない。それどころか、ヴェラールが出版したプルミエフェ訳による他のボッカチオ作品のインキピットからは、この訳者の名前は尽く消し去られている。ここでヴェラールが出版したボッカチオ作品を確認しておこう[39]。

1485年11月22日	プルミエフェ訳『デカメロン』
1493年4月28日	訳者不詳『名婦列伝』
1493年5月6日	ジャン・フルリー Jean Fleury 訳『恋人達』（『デカメロン』の第4日目の話、ジスモンダ Gismonda の物語）
1494年11月4日	プルミエフェ訳『名士列伝』
1499年2月9日	訳者不詳『異教の神々の系譜』
1503年頃	プルミエフェ訳『デカメロン』
1506年？	プルミエフェ訳『名士列伝』
1511年	プルミエフェ訳『デカメロン』

この一覧では、『名士列伝』（プルミエフェ1409年訳）は比較的遅く出版されたことになるが、実は彼と密接な関係にあった J. デュプレが仏訳『デカメロン』に先立つこと2年前の1484年2月26日に、これを *Des Cas des nobles hommes et femmes*（プルミエフェ1409年訳）のタイトルで出版しており、ヴェラール版はこのデュプレ版を元にしたものだった[40]。このヴェラール版『名士列伝』の序文は、例のヴェラールの「序文」19点の一つで、元々

デュプレ版にあったプルミエフェによるベリー公 Jean de Berry への献辞を、ヴェラールが加筆・修正し、自らの「序文」として利用したものである。デュプレ版のプルミエフェの献辞では主語は明らかにプルミエフェ自身で「私、ローラン・ド・プルミエフェが…翻訳した」(...je Laurens de Premierfait ... euz translaté de latin en françois ung tresnotable et exquis livre de Jehan Boccace Des Cas des nobles hommes et femmes, ...) とあるが、ヴェラール版では「翻訳された」と受動態にすることによって翻訳者を曖昧にしている (... fut de latin en françois translaté ung tresnotable et exquis livre de Jehan Boccace, Des cas des nobles hommes et femmes, ...)[41]。しかし、いつもプルミエフェの名前は消されるかといえば、そうではない。ヴェラールが1500-3年に出版したセネカ Seneca『作品集』*Les euures* はインキピットに「ローラン・ド・プルミエフェ師によりラテン語からフランス語に訳された」(Translatez de latin en francoys par maistre leurens de premier fait) と訳者プルミエフェの名前が読めるのである[42]。そうすると、ヴェラールは意識的にボッカチオ作品から翻訳者プルミエフェの名前を削除したのだろうか。

以上見てきたように、仏訳『デカメロン』のインキピットは単に「ここからジャン・ボカースの序文または百物語の書が始まる」Cy comence le plogue de Jehan / bocace ou liure des Cent nouuelles ことを伝えるのみで、翻訳過程、翻訳者名が削除されている。そうだとすれば、先に B.N. franç. 1122 の系列に属する写本をヴェラールが元にして仏訳『デカメロン』を製作したと推測したが、次のようにも考えられるのではないか。即ち、訳者はプルミエフェ、訳はラテン語を介した二重訳であることは承知の上であったが、ヴェラールは意識的にインキピットからこれらを削除した。しかし、そうすることによって一体どのようなメリットがあったのだろうか。それはまず第一に、テクストが二重訳であることを表明すれば、テクストのオリジナルへの忠実さが失われて、テクストそのものの価値が低下してしまう。この「テクストへの忠実さ」は、来たるべき16世紀ユマニスムの原典

に正確なテクストの探究ではなく、単なる表面上、体裁上の問題であった。第二に、これに関連するが、先に『名士列伝』の序文の例で見たように、訳者名を明らかにしないことで、訳者よりも自分の存在を暗に浮き彫りにさせることが出来る。つまりヴェラールとボッカチオ、同時に、ヴェラールと読者の関係を一層密接にさせることが重要であった。今一度、挿画を見てもらいたい。さすがに、他の作品のように[43]、作品を献ずるヴェラールの姿ではないものの、登場人物達とその物語を聞き取るボッカチオの姿のみで、この視覚的イメージの持つ直接性はそのままこの簡潔なインキピットに対応している。以上の二点は全て書籍商としての本を売り込みたいという姿勢の現れであり、それ故、訳者名や翻訳経緯を意識的に削除したと考えられるのではないか。

しかし、このような強引な介入は、『デカメロン』のような著者も翻訳者も既に亡くなっている古いテクストならいざ知らず、同時代の作品、翻訳では問題が生じなかったのだろうか。ヴェラールは1503年頃、ジャン・ブーシェ Jean Bouchet の作品『危険な道を渡りゆく狐』*Les Regnards traversans les périlleuses voyes des folles fiances du monde* を事もあろうにセバスチャン・ブラント Sebastian Brant の作者名で出版したのである。S. ブラントと言えば、『阿呆船』*Das Narrenschiff* がバーゼルで1494年に出版されるや、忽ちベストセラーになり、その三年後の1497年にパリで仏訳 *Nef des folz* が出版された[44]。ヴェラールもこの仏訳を手に入れて二人の庇護者シャルル八世とジャン・ダルブレ Jean d'Albret に献ずるべく「加工」に着手していた。結局、憤慨したブーシェはパリの高等法院に訴えて、ヴェラールが修正すべきこととなった。ヴェラールにも言い分はあったようだ。そもそも、この作品はブラントのあるラテン語悲歌の影響を強く受け、この悲歌がタイトルページの裏に印刷されていたのである。

この「ジャン・ブーシェ事件」のようにヴェラールと著者とのやり取りが見える作品が他に三点残されており、ヴェラールのテクストへの介入方法を知る上で大いに参考になる。それらは、ベネディクト修道士ギヨー

ム・アレクシスGuillaume Alecisの『口が災いした殉教者一覧』*Le Martilloge des faulces langues*（1487年2月以前に出版）、ジャン・ルメール・ド・ベルジュJean Lemaire de Belgesの『名誉と徳の殿堂』*Le Temple d'Honneur et de vertu*（1504年前半）、ギヨーム・ド・ディギュルヴィルGuillaume de Deguillevilleの『人生の旅路』*Le Pelerin de vie humaine*（1512年4月4日）である[45]。出版時期が『デカメロン』に近い『口が災いした殉教者一覧』の最終節には、その製作過程が述べられている。それによると、原稿はヴェラール（「パリ在住の良き、正しき、誠実な一人の商人」）によって読まれ、検討され、何人かのその道の専門家に見せた後に、彼等の修正を十分に加えられて印刷に送られた。（Et quant je eu tout ce fait et escrit, je l'envoiea a ung marchat bon, juste et loial en la ville de Paris faisant residence, lequel marchant apres ce qu'il eut la matiere veue, consideree et monstree a plusieurs nobles docteurs clers et expers en toute science, elle estant par eulx suffisaument corrige, ledit marchant l'a voulu pour perpetulle memoire faire imprimer ainsi que vous voiez.[46]）他の二作品も原稿入手のきっかけに違いはあるものの、出版の判断はヴェラール自身が下し、チェック機能として有識者一群を擁していたことは共通しているようである。恐らく、仏訳『デカメロン』も同じシステムで生まれたのではないだろうか。

それでは最後に、この仏訳『デカメロン』の「序文」と「結び」に込められた意味を探っておきたい。先に述べた通り、ヴェラール版の冒頭は二行のみのインキピットの後、直ちにボッカチオの「初日の序話」で始まる。しかし、これはイタリア語原典のように1348年のペスト大流行の「目撃者」ボッカチオが「恐ろしい書き出し」orrido cominciamento (p. 13)[47]で始めるのではない。ヴェラール版は、まず、「知ること」の重要性を説く。古代の賢人が認めるように、意見を聞いたり、本を読んだり、様々な国を旅して見聞を広めることが人を賢くさせる。そこで、私ボッカチオも旅をして見聞を広めていたところ、フィレンツェのペスト災禍に遭遇した。（... /

ouyr les ditz de plusieurs et lire plu/sieurs liures et tournoier p plusieurs / pays et veoir plusieurs choses font / lōme deuenir saige (...) Je doncq̃s Jehan bocace (...) ay voulu p plusieurs pties des / pays habiter (...) arriuay en la no/ble cite de Florence ... a2r~v)。このヴェラール版の書き出しには、ボッカチオがその「序詞」で「お読みになれば、ここに記された面白い事で、或いは楽しむこともでき、或いは良い忠告を受けることもできるでしょう。そしてこの忠告から避けるべきことと同様に従うべきことを知ることもできます。」...queste leggeranno, parimente diletto delle sollazzevoli cose in quelle mostrate e utile consiglio potranno pigliare, in quanto potranno cognoscere quello che sia da fuggire e che sia similmente da seguitare:... (p. 9) と述べた『デカメロン』の二つの意図、「楽しみ」と「徳化」は現れていない。勿論、この「知ること」の重要性は既に何れかの写本に存在しており、必ずしもヴェラールの主張とは限らないかも知れない。しかし、ヴェラールの参照した写本が特定出来ない現状では、彼がこれを採用したという事実から出発せざる得ないであろう。続いて、オリジナルでは延々と続くペストの災禍は、ヴェラール版ではほんの30行ばかりの描写で片付けられ、場面はサンタ・マリア・ノヴェルラ教会での女性達との邂逅へと展開していく。この後は途中省略はあるものの、オリジナルに近い筋の運びとなる。そして、オリジナルではこのまま初日の女王パンピネアの指名を得て、青年パンフィロ Panfilo が第一の話「セル・チェパレッロ Ser Cepparello の物語」を語るのだが、ヴェラール版ではこの語りの開始直前に、仏訳『デカメロン』の意図に関する重要な一節が挿入される。再び、私ボッカチオが登場し、自分の意図は、第一に、語られた中で最も面白く為になる百の物語を覚えておき、第二に、これらを短くまとめた「サン・ヌーヴェル（百物語）」という本を編み、第三に、この十人の登場人物達が憂鬱と悲しみ（寂しさ）を紛らわしたように、これを読み、又は読み聞かせられた人々に気晴らしを与えることであると述べる（...est mon intēcion (...) de reciter les dictes cēt / nouuelles les plus ioyeuses et pro/fitables que ie

pourray. et compo/ser vng petit liure compendieux q̃ / sera appelle le liure des cēt nouuel/les pour recreer les entendemens de / ceulx qui le liront ou orront affin q̃ / ainsi que les trois jouuenceaulx et / les sept dames en les racontāt pas/serent la grant melencolie et tristes/se ou ilz estoient. a5r)。ここでは、ボッカチオの二つの意図、「楽しみ」と「徳化」のうち、どちらかと言えば前者が強調されているようである。しかし、後の「結び」にも現われる「読み、又は読み聞かせられた」liront ou orront という表現は、単にこの作品が一人で読まれるのではなく、集団の中で読まれることが期待されていたことを伺わせる。この「読み聞かせられた」という表現はイタリア語原典には見当たらず[48]、当時は印刷術の出現とは無関係に音読から黙読へ読書形態が変化していたことを考え合わせれば、音読の読書形態を敢えて設定することは、作品の受容に関して大きな意味を持つだろう。各話は集団で読まれ、楽しまれながら、そして「作者」の「教訓」に耳を傾けつつ、互いに意見を述べ合う。ここには教育的配慮が読み取れるのではないだろうか。ところで、ヴェラールは何故このような冒頭の構成を採用したのか。くどくどとした抽象的なボッカチオの「序詞」やペストの災禍の描写を削除して、出来るだけ早く物語を始め、私ボッカチオを再度登場させて現場に居合わせたことを強調し、物語の意図を説明する。「商品」としての書物の「顔」である冒頭部分に常に気を配っていたヴェラールならではの簡潔さではないか。更に、この簡潔さは読み易さを助けるだろう。ヴェラールはこの「序文」の後に、各話の簡単な要約入り「目次」を埋め込んだ。これには各話の冒頭を示す紙葉付け番号まで記されている。また、本文の各話の終わりにも簡単なまとめと教訓が入れられており、これらは全て読者への読み易さへの配慮とみなすことが出来る。この作品冒頭部は、オリジナルに比べ、展開が歯切れよく、説得的で、臨場感も出て、そして読み易さへの配慮も忘れられていない。これもまた売れる作品にしたいという姿勢の一つの現われに違いないだろう。

続いて仏訳『デカメロン』の終わり部分を見てみよう。まず第一に、作

品終了を伝える文章に重複があること。第十日目の最後の物語、例の有名な「グリゼルダの物語」が語られた直後に、「ここで百の物語からなる別名ガレオット公、カメロンと称せられる書物の第十日目が終わる。」Cy fine la x. journee du liure nō/me cameron autremēt le prīce gali/ot cōtenāt ē soy cēt nouuelles. (265r) と物語終了の詞が入る。次に登場人物達のフィレンツェ帰還の説明が来て、著者ジャン・ボカス Jehā bocace の「結び」へと続き、コロフォンの冒頭でまたよく似た表現「ここで百の物語りからなる別名ガレオット公と呼ばれるカメロンと称せられる書物が終わる」Cy fine le liure de camerō autre/mēt surnōme le prīce galiot q̄ cōti/ēt cēt nouuelles ...(265v) となる。イタリア語オリジナルではボッカチオの「著者の結び」Conclusione dell'autore の後、つまり作品の最後に一度だけこの終了宣言「ここで別名ガレオット公と呼ばれるデカメロンと称せられる書物の十日目そして最後の日が終わる。」Qui finisce la Decima e ultima giornata del libro chiamato Decameron cognominato prencipe Galeotto. (p. 1261) がなされている。ヴェラール版の二例目はコロフォンであることから、印刷叉は出版者の「言葉」と捉えることが出来るが、一例目は不自然ではないだろうか。恐らく、ヴェラールはオリジナル同様、作品最後にこれを入れようとしたが、それではコロフォンの冒頭に置かれた二例目と続き、重なってしまう。そこで、著者ジャン・ボカス Jeha bocace の「結び」の前に入れた。しかし、それなら登場人物達のフィレンツェ帰還の説明の後の方がむしろ良かったかのではないかと思われるが、実はこの位置が物語の展開上最適だったのである。つまり、登場人物達のフィレンツェ帰還は翌日 ce iour esuiuat の第十一日目であり、第十日目の終了はこの帰還直前に表明されなければならない。出版者ヴェラールは著者ボッカチオ本人よりもはるかに物語に忠実だったのである。

第二に、ボッカチオは「著者の結び」で貞淑な女性には相応しくない言葉を使ったという非難に対して予め弁明するが、ヴェラール版の「結び」冒頭には、オリジナルには見当たらない一節が挿入されている。「続いて、

この書物の著者ジャン・ボカスはこの章で結びの言葉並びに、神とこの書物の聞き手と読み手に感謝の言葉を述べる。そしてこの著者並びにこの作品に対して気難しい人達から発せられた批判や避難に次のように答える」Et apŝ Jehā bocace a/cteur de cestui liure ē se pŝēt chapitre / conclud et (...) graces a dieu et aux es/coutans et lisans icelui. et si respōd / aux reṗhēnsiōs et crimes q̄ les enui/eux opposēt contre ledit acteur contre / sō ouuraige aīsi demeure. (265r) この一節では、主語は「著者ジャン・ボカス」の三人称で語られているが、これに続く飾り文字で始まる文では主語が一人称で、明らかに語りのレベルに変化が見られる。この一節はヴェラールによる「著者の結び」の要約と考えるのが自然であろう。この仏訳『デカメロン』の終わりでは、ヴェラールは、著者の構成よりもむしろ物語の展開を優先し、敢えて「著者の結び」にまで要約を入れることによって読者の読み易さに配慮したのではなかろうか。

結　　び

15世紀初頭にプルミエフェが『名士列伝』、『デカメロン』の順に仏訳したのと同様に、印刷書籍商ヴェラールは、恐らく、先に出版されたJ. デュプレ（1484年）とマンシヨン（1476年）の二種の『名士列伝』に触発されて、1485年に同じプルミエフェの訳による『デカメロン』を世に送った。しかし、以上見てきたように仏訳『デカメロン』の「序文」と「結び」を見るかぎり、直接的にはプルミエフェの翻訳意図にあるような「楽しさよりも役に立つことを多く見つける」ことが必ずしも強調されていたわけではない。ここでは取り上げることが出来なかったが、ヴェラールの本文への介入や、各話に付けた「教訓的注釈」commentaire moralisant を分析したピヨトール・サルワ Piotor Salwa によれば、『デカメロン』が本来持つ「卑猥」grivoiserie に力点が置かれている部分もあるが、全体に道徳・教訓的な色合いが強く、結果として、仏訳『デカメロン』は当時の教化作品群の中に位置付けることができるらしい[49]。勿論最終的な結論は本文の網羅的な

比較分析を待たねばならないが、恐らく、本論のささやかな分析で明らかになった「読み易さ」を始めとする読者への配慮から、ヴェラールが道徳・教訓的な要素に気を配ったことも推測出来よう[50]。ただし、ここには前提として自分の書物を「商品」として売り込みたいという胸算用がヴェラールに働いたことを忘れてはならない。そして、書物が「商品」として見なされれば見なされる程、書物を「物」と捉え、書物のテクスト以外、即ちパラテクストが一層重要になってくるはずである。翻訳者プルミエフェが『名士列伝』の影響を受けて、『デカメロン』を道徳的要素を強調したテクストを作成したとするなら、印刷書籍商ヴェラールはこのテクストを加工して、内容そのものばかりでなく、パラテクストにも注目して、要約と紙葉付けの付いた目次、各話と「結び」の要約、挿画等の読み易さの工夫を行うことで、読者に読書の楽しみを与えると同時に徳に向かわせる「商品」を世に出したと言えるだろう。本論では、商売人気質から「書物」の仕上がりに類い稀な熱意を見せた印刷書籍商と、翻訳者が入ることで「作者」の指示の特定がより一層困難な作品という、当時としては異例な対象を取り上げたにも拘らず、否、むしろそうすることで、15世紀の揺籃本インクナブラの成立の一端を探ることが出来たと考える。

註

1) リュシアン・フェーブル、アンリ＝ジャン・マルタン、『書物の出現』上、筑摩書房、1985年、p. 165; Saenger, p. 405; Labarre, p. 195; ロジェ・シャルチエ「書くこと・書物・読むこと」、ロジェ・シャルチエ『読書の文化史』所収、新曜社、1992年、pp. 38–46.

2) ロジェ・シャルチエ「書物から読書へ」、ロジェ・シャルチエ編『書物から読書へ』所収、みすず書房、1992年、p. 120; Brown, p. 10.「作者」については、ロジェ・シャルチエ「作者の形象」、ロジェ・シャルチエ『書物の秩序』所収、ちくま学芸文庫、1996年、pp. 55–119 を参照。

3) パラテクストについては G. Genette, *Seuils,* Seuil, 1987 を参照。

4) 現存する版本は Paris, B.N., Impr., Res. Y^2. 402. 本論では愛知県立大学付属図書館に寄贈された西洋中世文明ロマンス語研究所所蔵の写真版（長谷川太郎・日比

野雅彦編『西洋中世文明ロマンス語研究所所蔵文献目録　新編版』No 3959）を使用した。以降の引用は全てこれにより紙葉付け番号又は折丁付け番号で示す。版本の出版年等の年号は全て１月１日を一年の始めとする新式 nouveau style を用いる。

5）拙論「仏訳『デカメロン』研究Ⅰ　―ローラン・ド・プルミエフェ、翻訳者又は教訓家―」、『名古屋短期大学研究紀要』、第35号、1997、pp. 93–117 を参照。

6）Macfarlane はヴェラールが出版した書籍253点の一覧 List を中心にした書誌学的な論考であり、Winn はその副題が示す通り、ヴェラールの出版者としての戦略について語る部分が多い。しかし、何れの研究にも、本論文の仏訳『デカメロン』に関しては殆ど言及されていない。なおヴェラールの生年は依然としてはっきりしていないが、死亡は1514年５月以前であることは確実らしい。Macfarlane, p.x; Winn, p. 27. この項は Winn に負うところが多い。

7）これが同年11月22日に出版された仏訳『デカメロン』に先行することは Winn の調査で明らかになった。この時禱書はフランスで初めて出版された仏・羅語を併用した挿画入りのものであったが、ヴェラール自ら印刷したものではなく、ジャン Jean 又はピエール・ル・ルージュ Pierre Le Rouge の手によるものらしい。

8）Winn, pp. 15–16. Renouard によればヴェラールの最初の住居はノートル・ダム橋の上流側20番の家であった。Renouard, p. 274.

9）N. ジルは財政面でも文筆面でもヴェラールを支援した。この協力関係から初めて生まれた作品が『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』*Les Cent Nouvelles nouvelles*（1486年12月24日、印刷は P. ルヴェ）である。Scheurer, p. 416. なお、この『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』に初めてヴェラールの商標（プリンターズ・マーク）device が現れる。ヴェラールの商標については Winn, pp. 419–422.

10）Winn, pp. 85–97.

11）1505年７月にはトゥールのサン・イレー Saint-Hilaire 小教区に住宅を購入した。トゥールでの商売を手伝ったのはジャン・サザン Jehan Sasin である。Winn, p. 25.

12）P. ル・ルージュ、ジレ・クトー Gillet Couteau, ジャン・メナール Jean Menard、ギ・マルシャン Guy Marchan, ジャン・モラン Jean Morand, ピエール・ル・カロン Pierre Le Caron. ヴェラールは亡くなるまでに、少なくとも20人の印刷業者を使った。Winn, p. 30 注51.

13）橋上の住民は避難する時間が十分あったにも関わらず、行政側の対応が悪く、４、５人の死者が出て、行政官らが処分された。*Almanach de Paris*, t. 1, Encyclopaedia Universalis France, 1990, p. 115. この橋は1512年に再建され、68件の家が建設された。1517年11月、ヴェラール家（当時は未亡人のジェルミンヌ・ギ

アール Germine Guyart）にこの橋の26番目の家屋の賃貸借権が約束されたが、結局入居はしなかったようである。Duval, pp. 78–80.

14） このように言い始めたのは、A. Claudin のようである。Winn, p. 34.

15） マンシオンについては Michel 及び Saenger を参照。

16） Winn, p. 404; Macfarlane, pp. xvii–xviii.

17） パリで初めて出版された祈祷書はパーキエ・ボノム Pasquier Bonhomme の『ブールジュの聖務日課書』（1479年５月）であった。パリでは15世紀のフランスで出版されたほぼ半分のミサ典書と30％の聖務日課書が刊行され、主たる出版元は J. デュプレであった。時禱書は、版型、装飾、俗語（フランス語）使用といった点で他の祈祷書とは異なり、祈りの書であると同時に、富の誇示でもあった。この時禱書の出版が産業として成立するのは1490－1530年で、ヴェラール、シモン・ヴォストル Simon Vostre, ティエルマン・ケルヴァー Thielman Kerver, ジェルマン・アルドゥアン Germain Hardouyn 等が登場することによる。ヴェラールは、既に1481年頃にこのジャンルに新たな一歩を記していた P. ル・ルージュや J. デュプレの協力を得て1486年頃から豪華な時禱書を出版し始める。Coq, 1982, pp. 186–188; 宮下志朗『本の都市リヨン』、晶文社、1989年、pp. 91–94.

18） Coq, 1987, pp. 68–69.

19） 序文を付した最初の日付入りの作品は1493年６月２日のヤコブス・デ・ヴォラギーネ Jacobus de Voragine の仏訳『黄金伝説』*Legende doree* であった。ヴェラール序文付き作品の一覧は Winn, pp. 209–210.

20） 実際ヴェラールは庇護者の好みに合わせて作品を選んでいた。シャルル八世（歴史）、ルイ十二世（騎士道）、アンヌ・ド・ブルターニュ（女性論）、ルイーズ・ド・サヴォワ（敬虔な作品）、フランソワ・ダングレーム（後のフランソワ１世）François d'Angoulême（狩猟）。Winn, p. 64, pp. 104–205.

21） テクストを修正して出版することは1472年当時から既に行われていた。パリ最初の印刷工房をソルボンヌに開設したヨハン・ハインリン Jean Heynlin は、キケロの『義務論』*De Officiis* や L.Valla の『ラテン語の典雅』*Elegantiae linguae latinae* 出版の際、新たに章分けをし、自らの解釈を入れた。Coq, 1982, p. 178; Dureau, p. 166.

22） Macfarlane によれば、犢皮紙に印刷した豪華本は比類のない程見事な出来映えであったが、その他の作品は活字、挿画の点ではパリの他の出版業者（例えば J. デュプレ）ほどではないらしい。Macfarlane, p. xii.

23） *Boccace en France*, pp. 58–62; Gathercole, 1961 を参照。

24） 本文、結び、コロフォンには「紙葉付け」foliotage がなされ、目次には各話の簡単な要約と始まりの紙葉付け番号が記されている。件の挿画は作品冒頭と、３

－1，3－10，4－1，5－1，6－1，7－1，8－1，9－1，10－1のほぼ各日の第一話に見られる。3－10の挿画の位置は意図的なものではなく、むしろ2－1に持ってくるべきところを間違ってここに入れたように思われる。ここにも、この版本の粗雑さが現われているのではないだろうか。

25） A.F. Didot は Renouvier の手厳しい意見（Renouvier, p. 39）を紹介して、自らも賛同している。Didot, pp. 126–127. Labarre はヴェラールが使用した木版画がテクスト内容にマッチしていなかったが、これはヴェラールが元来商売人で、新たな版木制作に資金をつぎ込むことにためらったと推測している。Labarre, p. 212. 実際、この仏訳『デカメロン』と翌年1486年4月27日に出版された当時人気の『哲学者の教訓賦』*Ditz moraux des philosophes* の木版画こそ再利用されてはいないが、その後の作品の木版画はしばしば繰り返し他の作品で利用されるようになる。Macfarlane, p.xix.

26） *Boccace en France*, p. 71; Macfarlane, pp. 12–13, p. 19, p. 27, p. 79.

27） Macfarlane, p. 1; Winn, p. 487. なお、折衷書体については Labarre, p. 206 を参照。

28） この部分 Labarre, pp. 209–210; Dureau（特に p. 169）に拠る。

29） J. デュプレは仏訳『デカメロン』出版の翌年にアウグスティヌス Augustinus の『神の国』*Cite de Dieu* を出版するが、これには20年前の写本の細密画を模写した木版画を使用している。Labarre, p. 209.

30） Bozzolo の詳細な研究によれば、完全訳写本とは、Vatican Palat lat. 1989; Paris B.N. fr. 129; Arsenal 5070. 他の12点は Paris B.N. franç. 239; franç. 240; franç. 1122; fr.12421; Archives Départementales de la Haute-Vienne (Limoges) 5f(4F)-Fonds Bosvieux（不完全）; Österreichische N. B. (Wien) 2561; B.M. (London) ADD. 35322-23; Royal 19 E.I; Bodleian L. (Oxford) Douce 213; Koninklijke B. (Den Haag) 133 A 5; Harvard U. Houghton L. (Cambridge) Richardson 31; U. of Pennsyilvania L. (Philadelphia) FR. 9. 以下の分析に使用した写本の転写は Bozzolo による。Bozzolo, pp. 25–29, pp. 100–110, pp. 155–165, pp. 183–186.

31） Macfarlane, p. 67.

32) パリ B.N.fr. 129 写本（f. 4r）にはこの二人の翻訳者の図象（右の二人）も残されている。

図 2

Pratiques de la culture écrite en France au XVe siècle, édités par Ornato, M. et Pons, N., Louvain-La Neuve, Fédération Internationale des Instituts d'Etudes Médiévales, 1995, 巻末図象一覧より。

33) 仮に、この写本を参照したとしても、『名士列伝』がラテン語作品であったことから、『デカメロン』もラテン語作品と考えていたと思われる。

34) *Les Cent Nouvelles nouvelles*, éd. Th. Wright, t.1, Bib. elz., 1858, Kraus Rep., 1972, p. xxij.

35) 本文中でこの "Cameron" という名称は、第十日目が始まる直前に『デカメロン』定番の名称 "Cameron autremet nomme / le price galiot des cēt nouuelles ..." (232r) でも一度使用されている。

36) Hauvette もヴェラール版の「グリゼルダの物語」はプルミエフェ訳ではなく訳者不詳のものであるとしている。Hauvette, 1909, pp. 103–104. Golenistcheff-Koutouzoff, E. (p. 146) もこの Hauvette 説に肯定的である。

37) 出版はロバン・フーケ Robin Foucquet とジャン・クレ Jean Cres の両人による。ジャン・ド・ロアン Jehan de Rohan がメセナとなってこの印刷術とは縁のなかった土地に彼等を1484年に招き入れ、出版に従事させた。Golenistcheff-Koutouzoff, p. 146.

38) Paris B.N.fr. 129; franç. 239; franç. 240; fr. 12421; Österreichische N. B. 2561; B.M., ADD. 35322–23; Bodleian L., Douce 213; Vatican Palat lat. 1989; Harvard

Richardson 31; Pennsyilvania L. FR. 9 の10点。なお B.N. franç. 1122 写本は一枚目が破損。

39) 詳しくは前掲拙論 pp. 102–105 の「ボッカチオ仏訳作品一覧」を参照。

40) 更に、8年前の1476年には、マンシオンがこの『名士列伝』を ***De la ruyne des nobles hommes et femmes*** (プルミエフェ1400年訳) のタイトルで出版している。これについては Michel がアミアン Amiens 図書館所蔵の版本を紹介している。

41) 何れも引用は Winn (p. 326, p. 333) による。ただし、不注意によるものか、このヴェラール版の「目次」に続く一文で、訳者プルミエフェの名前が消されずに残っている。Winn, p. 329.

42) 引用は Macfarlane, p. 75. なおこのセネカ『作品集』は『四つの徳』***Quatre vertus cardinales selon Senecque*** と思われるが、これはセネカではなく、マルタン・ド・ブラガ Martin de Braga の作品とされており、訳もプルミエフェ訳と考える研究者が少ない。Bozzolo, p. 8; Gathercole, 1958, p. 265.

43) 他の作品でヴェラールの献呈の様子を入れた作品としては、ボッカチオの『名婦列伝』(1493年) を始めとして、アリストテレスの『政治学』***Politicques d'Aristote*** (1489年)、『オロシウス』***Orose*** (1492年)、L. Valla の『教訓話』***Les Apologues*** (1493年) 等々数が多い。

44) この『阿呆船』はピエール・リヴィエール Pierre Rivière によって訳され、ジャン・ランベール Jean Lambert がジェフロワ・ド・マルネフ Geffroy de Marnef とジャン・フィリップ・マンストネル Jean Philippe Manstener のために印刷した。この「ジャン・ブーシェ事件」については、Bergeron, Picot&Piaget; Winn, pp.78–84 を参照。

45) この三点の分析と後の引用は Winn, pp.72–81 に拠る。

46) Winn, p.72.

47) 引用は Giovanni Boccacio, *Decameron*, a cura di V. Branca, Giulio Einaudi, 1980 により、日本語訳はボッカチオ作野上素一訳『デカメロン (十日物語)』(全6冊)、岩波文庫、1975を参考にした。

48) イタリア語原典では動詞「読む」leggere のみで表現されている。例えば、「序詞」の "questa leggeranno", 「著者の結び」の "l'averle lette". また、他のヴェラールの献呈本も、このような読書形態を意識して製作されたようである。Winn, p. 459.

49) Salwa, L'art, p. 73–74. なお、Salwa, La prima は初日第一話「セル・チェパレッロの物語」を詳細に比較分析し、オリジナルと比べると、ヴェラール版のこの話は「完全な改作」un rimaneggiamento completo であるとしている (p. 127)。

50) シャルル八世への献辞では全て道徳的側面が強調されていた。Winn, p.57.

Anthoine Verard 参考文献

紙面の都合上 C. Pickford が The Scolar Press から出しているヴェラールの諸刊本、その他の参考文献は Winn の Bibliography に譲り、ここでは最小限に止めた。

Bergeron, R., "Le nom du livre. manières d'intituller les premiers livres imprimés en France", in *Pratiques de la culture écrites en France au XVe siècle*, Louvain-La-Neuve, 1995, pp. 441–458.

Boccace en France, De l'humanisme à l'érotisme, Bibliothèque Nationale, 1975.

Boulnois, M., "Anthoine Vérard, éditeur d'art", in *France graphique*, No. 131, nov. 1957, pp. 20–25.

Bozzolo, C., *Manuscrits des traductions françaises d'œuvres de Boccace XVe siècle*, Padova, Editrice Antenore, 1973

Brown, C. J., *Poets, Patrons, and Printers: Crisis of Authority in Late Medieval France*, Cornell, 1995.

Cazauran, N., "Marguerite de Navarre dans l'Heptaméron ou l'auteur invisible", in *Conteurs et romanciers de la Renaissance, Mélanges offerts à G.-A. Pérouse*, Champion, 1997, pp. 101–110.

Claudin, A., *Histoire de l'imprimerie en France*, Paris, 1900–1905, t. 2, pp. 385–506.

Coq, D., "Les incunables: textes anciens, textes nouveaux", in *Histoire de l'édition française t. 1, Le livre conquérant*, Promodis, 1982, pp. 176–193.

—, "Les débuts de l'édition en langue vulgaire en France: Publics et politiques éditoriales", in *Gutenberg Jahrbuch* vol. 62, 1987, pp. 59–72.

Di Stefano, G., "Il Trecento", in *Il Boccaccio nella cultura francese*, a cura di C. Pellegrini, Olschki, 1971, pp. 1–47.

—, "La traduction du Decameron", in *Essai sur le moyen français*, Padova, Liviana editorice, 1977, pp. 68–96.

Didot, A. F., *Essai typographique et bibliographique sur l'histoire de la gravure sur bois*, Firmin Didot, 1868.

Dureau, J.- M., "Les premiers ateliers français", in *Histoire de l'édition française t. 1, Le livre conquérant*, Promodis, 1982, pp. 162–175.

Duval, G., "La Maison d'Anthoine Vérard sur le pont Notre-Dame", in *Bulletin de la Société de l'Histoire de Paris*, 1900, No. 2, pp. 78–83.

Gathercole, P., "The Manuscripts of Laurent de Premierfait's works", in *Modern Language Quarterly*, t. XIX, 1958, pp. 262–70.

—, "Illuminations on the French Decameron", in *Italica* XXXVIII, 1961, pp. 314–18

Golenistcheff-Koutouzoff, E., *L'Histoire de Griseldis en France au XIVe et au XVe siècle*, Droz, 1933.

Hauvette, H., *De Laurentio de Primofato qui primus Joannis Boccacii opera quaedam gallice transtulit ineunte seculo XV* (thesis litterarum facultati Universitatis Parisiensis), Paris, Hachette, 1903.

—, *Les plus anciennes traductions françaises de Boccace (XIVe–XVIIe siècle)*, extrait du *Bulletin Italien* de 1907, 1908, 1909, Bordeaux, Peret & Fils, 1909.

Labarre, A., "Les incunables: la présentation du livre", in *Histoire de l'édition française t. 1, Le livre conquérant*, Promodis, 1982, pp. 195–215.

Macfarlane, J., *Antoine Vérard*, London, 1900; rpt., Slatkine, 1971.

Michel, H., *L'imprimeur Colard Mansion et le Boccace de la Bilbiothèque d'Amiens*, Auguste Picard, 1925.

Pickford, C.E., "Fiction and reading public in the fifteenth century", in *Bulletin of John Ryland's Library* 45, 1963, pp. 422–438.

—, "Antoine Vérard éditeur du《Lancelot》et du《Tristan》", in *Mélanges de langue et de littérature françaises du Moyen Age et de la Renaissance offerts à Charles Foulon*, t. 1, Rennes, 1980, pp. 277–285.

Picot, E. et Piaget, A., "Une supercherie d'Antoine Vérard. *Les Regnars traversans* de J. Bouchet", in *Romania*, XXII (1893), pp. 244–60.

Renouard, P., *Documents sur les imprimeurs, libraires, cartiers, graveurs, fondeurs de lettres, relieurs, doreurs de livres, faiseurs de fermoirs, enlumineurs, parcheminiers et papetiers ayant exercé à Paris de 1450 à 1600*, Paris, 1901; Slatkine, 1969.

Renouvier, J., *Des gravures en bois dans les livres d'Antoine Vérard*, Paris, 1859.

Rossi, L., "Pour une édition des *Cent Nouvelles nouvelles*: De la copie de Philippe le Bon à l'édition d'Antoine Vérard", in *Le Moyen Français* vol. 22, 1988, pp. 69–77.

Saenger, P., "Colard Mansion and the evolution of the printes books", in *The Library Quarterly* 45, 1975, pp. 405–18.

Salwa, P., "La prima novella del Decameron nell'edizione di Antoine Verard del 1485", in *La nouvelle française à la Renaissance*, Slatkine, 1981, pp. 121–128.

—, "L'art de vivre et la leçon de vie: Boccace et son adapteur (Vérard, 1485)", in *Studi Francesi* vol. 25, 1981, pp. 73–82.

Scheurer, R., "Nicole Gilles et Anthoine Vérard", in *Bibliothèque de l'Ecole des Chartes*, 128, 1970, pp. 415–9.

Winn, M. B., *Anthoine Vérard, Parisian Publisher, 1485–1512, Prologues, Poems and*

Presentations, Droz, 1997.

Etude sur la traduction française du *Decameron* II

— Anthoine Vérard, libraire-imprimeur ou stratégiste —

Tomohiko HIRATE

La stratégie éditrice d'Anthoine Vérard, libraire-juré et principal éditeur de livres de luxe en français, différait de celle de libraires-imprimeurs savants à l'époque de la Renaissance. Il reprenait des textes français, le plus souvent déjà imprimés, recomposait les prologues pour son propre compte et modifiait les textes ainsi que leur disposition pour les dédier aux rois et aux reines dans des exemplaires de présentation sur vélin, somptueusement décorés et plus proches des manuscrits. Ce stratégiste a choisi pour son édition du *Decameron* en français (1485) le texte que Laurent de Premierfait avait traduit en 1414, car, considerant ces cent nouvelles boccaciennes comme une œuvre aussi moralisatrice que *De casibus virorum illustrium*, il y trouvait "plus profit que de delict". Vérard modifia non seulement ce texte mais aussi l'introduction et la conclusion traduites par Premierfait. Il y joignit l'incipit sans le nom du traducteur, ni le processus de la traduction, afin de faire cette œuvre facile à lire pour la lecture muette et orale. Nous en conclurons que ce libraire-imprimeur voulait faire du *Decameron* français 《une marchandise à vendre bien》 moralisatrice et divertissante.